活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第6号/平成14年7月15日発行　青森県立保健大学広報誌

平成14年度青森県立保健大学入学式

CONTENTS

新入生歓迎のことば／学長挨拶……2
事務局長挨拶……3
新入生歓迎挨拶……4
新入生・上級生のことば……7
新入生合宿研修……10
特別講義／黒川紀章氏……12
進学相談会・オープンキャンパス記録……13
研修生インタビュー……14
健康科学研究研修センター紹介……16
サークル活動紹介……17
教室(領域・分野・職域等)紹介/看護学科……18
〃　理学療法学科……19
〃　社会福祉学科……20
〃　人間総合科学科目……21
〃　事務局総務課……22
人事異動／新任・転入等……23
昇任・転出等……24
編集後記……24

［学長挨拶］

新入生歓迎のことば

青森県立保健大学
学長
新道　幸惠

新入生の皆様ご入学おめでとうございます。本日１６４名の皆様を本学にお迎えしたことによって、本学では初めて、４学年の学生がそろい、計６５２名が本学キャンパスに学ぶことになりますので、皆様方のご入学は、教職員一同にとりましては２重の喜びであり、心から歓迎しております。

木村知事並びに、富田県議会議長、山中健康福祉部長、土井後援会会長の方々におかれましては、公務ご多忙の中、本日ご臨席を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。また、ご父母の皆様には、お子さまのご入学を心からお祝い申し上げますとともに、本日ご出席いただきましたことに深く感謝申し上げます。

本学では、この２１世紀に求められる保健医療福祉の人材育成を目標としております。近年における我が国の保健医療福祉は少子高齢化を背景として、変革は著しく、それだけに高度で質が高く、保健医療の各専門職と有機的に連携協調し、時には統合的に協同する事のできる専門職が必要とされています。改めて申すまでもなく、少子高齢化の現象は、社会のあらゆる側面に影響を及ぼして多方面からの対策が求められております。それらの対策の中でも重要であるのが、「人々が健康で長生きをし、幸せな生活をする」ことができるようにすることです。国では、その施策として、平成１２年度から国民健康作り運動である「健康日本２１」が明らかにされました。その施策は、各都道府県につながれ、具体化されてきております。青森県も「健康あおもり２１」と名付けられて、積極的に進められています。その対策の「健康」という言葉には、単に病気ではないということではなく、人それぞれの価値観や権利が尊重され、心豊かに生活するという生活の質即ちＱＯＬの意味が含まれています。

本日入学された皆様方は、人々が、「健康」で質の高い生活をすることを目標にしたケアを行う専門性を備えるための学習をこれから始めることになります。本学の看護学科では、看護師、保健師或いは助産師に、理学療法学科では、理学療法士に、社会福祉学科では社会福祉士にと学科ごとに育成する専門職は異なりますが、そのいずれにおいても人々の健康で質の高い生活のためにケアをする保健医療福祉の専門職としての共通な役割があります。保健医療福祉の中核となり得る看護、理学療法、社会福祉の各専門職を育成することを目標にしている本学におきましては、３学科において育成する専門職における共通した役割に求められる能力としてヒューマンケアを提供できる能力と３つの専門職間において連携協調する能力をとりあげその育成を教育理念としています。ヒューマンケアは、ケアを受ける人とケアをする人との間に、ケアする人の専門的な知識や技術、態度を介して創造的な関係が成立することによって可能になります。ヒューマンケアの能力は、必要な知識を理解し、体験を通して、わかるレベルからできるレベルへと到達するための学習によって得られることでしょう。

大学は多くの専門的な知識を得るためだけに学ぶ場ではありません。小林康夫氏（知の技法,1994）の言葉を借りれば、特別な知の行為の主体者になる仕方を学ぶ場なのです。とりわけ、変革の時代といわれている今日、大学におけるその学びへの期待は大きくなっています。

美しく、そして優しく、時には厳しい四季おりおりの自然の様相豊かな八甲田の山並みに囲まれたこのキャンパスが、新入生の皆様の、旺盛な知的好奇心と、試行錯誤の積極的な行動力を育む力となり、これからの４年間に大きな成果を上げられますことを祈念して祝辞とします。

［事務局長挨拶］

３０年先を見据えて

事務局長
秋元　正隆

東北本線を挟んで直線距離にして２００メートルほどの所に、数十年来、居を構えている私にとって、青森県立保健大学は、その建設の槌音をいまもって思い起こすことのできる身近な存在である。

私事ではあるが、数年前、娘が絶対面倒を見るという条件と引き換えに渋々飼うことを許した愛犬を、何故か自分が毎朝引き連れながら、線路越しに見える日に日に姿を変えていく建設途上の大学の建物、健康上の理由で十数年来続けているウオーキングのコースとして時々利用させいただいている競技場のトラック、大学は、私のプライベートな時を過ごすのには欠かせない存在であった。と同時に３０年以上に及ぶ青森県職員としての期間の殆どを、コンクリートの街並みに囲まれた青森県庁舎内で過ごしてきた私にとって、大学のもつ環境と雰囲気は憧れの職場でもあった。

入学式が挙行された４月４日、青森県立保健大学の構内は、暖冬少雪のせいか、例年であれば冬の名残をとどめている景色とは異なり、既に萌葱色の息吹の芽が顔を覗かせていた。蛍雪の時からひと時の解放感に浸っていたであろう新入生も、これから始まる大学生活に適度の緊張感と、あふれる希望と期待に輝いて見える。

さて、早いもので２１世紀の扉が開いて既に１年半が経過した。「光陰矢の如し」月日はとどまることなく過ぎ去っていくものである。２０世紀後半に兆しを見せた少子高齢化の波は、予想をはるかに超える早さで２１世紀の時代を席巻して行くはずである。今こそ、既存の価値観に拘泥することなく、また、変革を恐れず、しっかりとした時代認識を持つ人材の育成が求められている。

本学の設置者である木村守男青森県知事は、常々、２０年、３０年先を見据え，大局に立った上でその時々の仕事を緊張感を持って行うようにと行政運営に当たっての基本的な心構えを県の職員に求めている。

学生諸君にもこの言葉を贈りたい。３０年先の社会の有り様を見据え、自分の人生設計を描き、着実に歩んで欲しいと。そのためには物事を冷静に見極める慧眼を日頃から養わなければならない。

「玉磨かざれば光なし」いかに優れた人材であっても日々の努力の積み重ねによって初めて光り輝くものである。３０年先の皆さん一人一人が大きく光り輝いていることを心から念願している。

５月中旬、構内に大山桜を植樹した。年月を経て大樹となり、見事に咲き誇る満開の桜のもとに相集う学生の姿がある。私の思い描く３０年先の青森県立保健大学の光景である。

「余談」

私の趣味の一つにビデオによる映画鑑賞がある。毎週末、我が愛する“TSUTAYA”に足を運ぶのを楽しみにしている。が４月着任して間もなく“TSUTAYA学生アルバイト募集”の活字を学生掲示板の中に見つけて以来、私の“TSUTAYA”でレンタルする映画のジャンルが何故か一変したのである。そして、私のカード入れには、もう一枚の本学から遠く離れたレンタル店の会員カードが新しく収まっている。

ようこそ　保健大学へ

看護学科助教授
中村由美子

ご入学の皆さん、ならびに保護者の皆様方、ご入学おめでとうございます。

看護学科で皆さんは、看護師・保健師・助産師になるための勉強をしていきます。

『看護』という言葉の『看』という字の意味は目の上に手をかざしてみることから、“よく見る”という意味であり、『護』は読み方から“まもる”ということです。では、何をよくみてまもるのかということについて、これから学んでいきます。

そのため、カリキュラムは、人間の理解や看護の基本的なことを学んだ上で、専門的な知識を幅広く学ぶようになっています。1年生から実習という実践の場で学んでいくことも看護学科の特徴です。

私は、次の３つのことをこれから看護の勉強をする皆さんに提案したいと思います。

1．根拠に基づいた看護を実践するために、科学的・論理的な考え方をしてほしいと思います。なぜという気持ちを大切にしましょう。
2．私たちが看護を提供する人を大切にするために、まずは自分を、そして友達や家族を大切にしていきましょう。
3．是非、社会に目を向けましょう。今いる青森を、そして、日本・世界をみてみましょう。

今は、赤ちゃんと同じように生まれたばかりの皆さんが、4年後大学を卒業するときには看護職者として大きくなっていることを期待しています。そのために教職員一同お手伝いをしたいと考えています。

木村知事からのお話のように、玉も磨かなければ光りません。大学時代によく学び、よく遊び、充実した生活を送ってほしいと考えています。

感性がなければ知識もいきない ～デジタル・サイバー・リアルの時代にきみは何を学ぶ～

理学療法学科
講師
佐藤秀一

世界自然遺産を有する青森の地で、大学生活を送ろうとする皆さん、ようこそ。自然の彩り豊かな青森であってさえも、種々の環境問題が生じています。生態系に関しては絶滅危惧種に指定されている生きものも少なくありません。皆さんは保健、医療、福祉を専門に学ばれるわけですので、ことにつけ人間の生命の尊さについて考え感じることがあるでしょう。しかし、人間の生命だけではなく、「宇宙船地球号」のごとく地球全体がひとつの生命の根源であるという視点で生命というものを考えてほしいと思います。ここに環境教育のバイブルともいうべき書物「センス・オブ・ワンダー」（＝神秘さや不思議さに目を見はる感性、レイチェル・カーソン著）の一節を紹介します‥‥「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない‥‥。（註：勉強しなくてもよいという意味ではない！）

人間の動作を解析して、その結果を日常生活に役立てようとするとき、人間やそれをとりまく環境をコンピュータ上に構築して提示する手法が用いられ、サイバー・アシスト研究とかデジタル・ヒューマン研究と呼ばれています。そして、これらの研究の要は情報処理技術と感性のマッチングにあります。ロボットを引き合いにだすと、産業用ロボットからより人間っぽいヒューマノイドへと進化し、今では癒し系ロボットの開発が花盛りです。生命の尊さを中心に構築される感性豊かな情報技術＝デジタル・サイバー・リアルの時代に、青森の豊かな自然に触れながら有意義な学生生活を送ってください。

学生生活をいかに送るか

社会福祉学科
講師
八戸　宏

ご入学を心より歓迎致します。私は「学生生活をいかに送るか」について助言致します。

学生を毎年観察していると「大学に使いこなされる学生」と「大学を使いこなす学生」の二つのタイプがあるように考えられます。

前者は、「なぜ大学に入るのか」という目的意識が希薄で、「とりあえず必要単位を取得し卒業、就職もどこかに」と考え始めている。大学を「選んで入った」という気概、愛校心も乏しいため必要最低限の生活で満足する。

一方「使いこなす学生」は、自分の興味・関心に基づいて科目を選択し「自分らしさ」・「自分に相応しい学生生活とは何か」という考え方で行動する。大学生という身分（特権）が与えてくれるあらゆる機会を精一杯活用し、先生や設備、人脈や大学のイベントにも積極的に関わる。後者が望ましいのは疑う余地がない。学問することに対しても、このような学生は、知的好奇心が旺盛で、真理を探究する態度も徐々に身につけて爽やかである。

常識と思われている事柄に対しても、適度な懐疑を抱き自ら確かめようとする。赤ちゃんが産まれてすぐ泣けること、ナースコールへの返答「どうしました？」、背中や頭を掻いて差しあげる際の「もういい？」等の場面でも、常識に捕われない正しい対応を探し求めていくことが可能となる。ご両親にも一言お願い致します。子の自立のために、「対象恒常性（信頼・依存出来る対象であり続けること）」の確保をお願いします。

最後に、大学の生命は「自由な発想」の出来る「自由な環境」と考えていますが、自律を学びながら、存分に大学生活を楽しんで下さい。NO.１の人生よりもOnly1の人生を歩んで欲しい！と願っています。そこでは「苦痛か快楽か」のレベルでは味わえないワクワクする知的体験を享受出来る筈です。Rejoice! 楽しみましょう！

「9割の常人」はどうすればいいの？

人間総合科学科目教授
Noel Fukushima

入学式では人間総合科学科目を代表して新入生歓迎のスピーチをさせられましたが、「大学教員の９割は奇人で、学生の９割は常人である」という神戸大学の宇津木成介氏のことばを紹介しました。「神戸大学クォータリー、2002年春号No.2」からの引用でしたが、その前後を含めると引用した部分は次のようになっています。「当然のことながら、大学教員の９割は奇人である。個人レベルだけでなく、学科レベル、学部レベルでそれぞれが特異的でなければならない。これに対して、学生の９割は常人である。従って個々の教員が理想とする教育が、そのままの形で普通の学生に通じるはずがない」。

記事は、宇津木氏がこれからの大学に要求される英語教育についての考えを述べたものですが、教員が理想的だと信ずるところのものが必ずしも学生たちにとって理想的なものだとは限らないという論点は傾聴に値します。即ち、逆もまた真なりで、奇人が不可とするものが常人には可であるものだってある筈だからです。しかし、残念ながら、奇人、特に地位や年齢が重みを増してきた奇人の中には己の偏狭な理想や借り物の価値観を疑ってみようともしない人たちがいることも事実です。だとしたら、常人はどうすればいいのか。

小生は「批判精神を高める」ことだと思います。学生の批判的な言動に対しては「不遜」「無知」「反抗的」といったレッテルが貼られるかもしれません。が、ひるんではいけません。教師の話を常に批判的に聞き、分からない、どこかオカシイと思ったら即座にそう伝えることです。的外れな質問、重箱の隅をほじくるような質問であっても、それらにきちんと答えられないような教師は奇人という名にさえ値しない無能教員なのですから。

充実した大学生活のために

人間総合科学科目
教授
佐藤　正昭

希望に燃えて大学生活をスタートした新入生諸君に心からの声援を送ります。これから始まる４年間の生活が充実したものになるかどうかは、皆さん一人一人の心構えによるものであります。

大学生活が楽しく、充実したものであるということ、それは誰かが与えてくれるものでなく、一人一人の主体的な取り組みによって形作られるものであります。

私は新入生オリエンテーションで、この大学生活で皆さんに心掛けてほしいことを延べました、それは、心身ともに元気で活力をもってほしいこと（Vitality）、将来の職業人としての専門性を高めてほしいこと（Speciality）、自分自身の個性や創造性を磨いてほしいこと（Oliginality）、そして人の痛みや人を思い遣る豊かな心をもった人間性を身につけてほしいこと（Personality）の４つであります。

この４つは、それぞれ並立的なものではなく、この基盤になるのは何と言っても豊かな人間性(P)であることを銘記しなければなりません。

皆さんは、将来医療、福祉の分野の職業を志向しているのですが、そこで最も求められのは何でしょうか。確かに高度な専門性(S)や創造性(O)が大切であることは論を待ちませんが、それよりも何よりも豊かな人間性(P)であると思います。皆さんが将来職業をとおして向き合う人々は、皆さんのもつ豊かで、温かい心に必ずや癒されるものと思います。

この大学生活、多くのことにチャレンジし、交流を深め、かけがえのない友だちを得て下さい。そして、卒業して志望の職業に就いたとき、良質なブランディ（VSOP）を少し味わえるようになることを期待します。

新入生のみなさんへ

社会福祉学科4年
高橋亜希子
（青森県八戸北高校出身）

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。 私たち在校生も、みなさんのご入学を大変うれしく思っております。

みなさんのご入学で、この保健大学もやっと全学年そろいます。以前にも増して、にぎやかで活気のある大学になるだろうと期待しています。

保健大学は校舎も新しく、設備も整っています。また、私たちをご指導して下さる先生方も、大変個性的な方ばかりです。４年間で出来るだけ多くのことを吸収できるように、講義以外の時間にも、先生の研究室をたずねてみてもいいと思います。

大学生になると、高校生の頃よりも、自分の自由になる時間が増えてきます。その時間をどう使うかは、みなさん次第です。サークル活動やボランティア、アルバイト、旅行、勉強など、できることはたくさんあります。しかし、私の場合、アルバイトのやりすぎで、学校で泣きながらレポートの締め切りと戦っていたことが何度もありました。アルバイトのやりすぎに注意して、勉強するときはしっかり勉強し、遊ぶときは思いっきり遊んで、充実した大学生活を送って下さい。

大学では「ゼミ」といって、1人の先生に数名の学生がついて、小グループで行う授業があります。ゼミごとに勉強する内容は異なりますが、ロールプレイを行うなど、普段の講義よりも実践的なことを学ぶこともできます。また、ゼミごとに旅行や飲み会があることが多いので、ゼミの先生やメンバーとは、親密になれるチャンスがたくさんあると思います。

これからの慣れない生活に戸惑うこともあるかもしれませんが、そんな時には気軽に声をかけて下さい。みなさんが大学生活に早く馴染めるように、私たちも力になりたいと思っています。

入学して

看護学科1年
原田修一郎
（青森県五所川原高校出身）

私は高校に入った頃から看護師になりたいと思い始めました。だから、この大学には絶対入りたかったです。そして合格発表の時、自分の受験番号があった時はうれしかったです。そして、うれしさのあまり祖父に抱きついたらその日のうちにニュースで流れて恥ずかしかったです。

入学してからもう二ヶ月。やっと大学生活にも慣れてきて楽しい毎日を送っています。最初のうちは周りが皆標準語なことに驚き、自分も標準語を使っていましたが、今ではバリバリの津軽弁。おそらく、友達も雰囲気で理解しているだけかもしれません。でも、私は標準語を使いません。津軽弁は最高だからです。だから皆に津軽弁の良さを知ってもらいたいです。そして、津軽弁に染まってほしいです。今、私の一番の喜びは、友達が実家に帰った時、言葉がかわったと言われたというのを聞いた時です。なぜか幸せです。

私が今一番楽しいことは、体を動かすことです。スポーツをすればサッパリします。だから、サークル活動には積極的に参加しています。そのおかげで、先輩達と仲良くなることができました。高校時代の部活とは違い、学生主体で自由な感じが大好きです。これからも大学生活の醍醐味を味わっていきたいと思います。

今までの二ヶ月の間に、少しずつですが看護の演習や歴史、人体の構造などを学んでいると、自分は保健大学生なのだということを自覚します。特に血圧測定や洗髪などをしていると、今までにない新鮮な感動を味わうことができました。これからは、もっと高度で専門的なことを学んでいくことになると思います。これからの四年間、それらのことを身につけるためにがんばっていきたいと思います。

保健大生になって

理学療法学科1年
中村あゆみ
（青森県八戸東高校出身）

入学してから早いもので二ヶ月が経ちました。すること全てが初めてで、緊張していた四月と比べ大学生活や一人暮らしにもだいぶ慣れてきたと思います。

しかし、授業は慣れるということがないと思います。授業の雰囲気は分かってきましたが、学ぶ内容はどれも初めてで、新鮮です。医療について学んでいると、今まで考えなかったようなことについて、深く考える機会を与えられる気がします。自分で疑問を持ったことは、自分で調べていかなければならないし、興味を持って授業に取組めば先生たちはそれに答えてくれます。やはり高校とは授業の雰囲気は違いますが、自分が学びたい専門科目を学べるので、大変ですが楽しく授業を受けることができます。20人全員が同じ目的をもって勉強しているので、お互いに助け合い刺激し合えるので、一層授業は楽しいです。今学んでいることが実際に職場に出たときに生かされる知識になるのかと思うと、毎日の講義を無駄にせず、責任をもって授業を受けていかなければならないのだと、大学生になってひしひしと感じています。

責任を持つということに関しては、授業だけではありません。私は、大学一年生であると同時に青森一人暮らし一年生です。自分のことには責任を持って行動しなければなりません。生活することがどれだけ大変か、一人暮らしをして分かったような気がします。

まだ大学生活は始まったばかりです。これから多くの人と出会い、その出会いを無駄にせず様々なことを学び吸収していきたいと思います。そして、人として成長し、医療に携わっていきたいと思います。

保健大学に入学して

社会福祉学科1年
千葉　瞳
（青森県青森西高校出身）

入学して以来、毎日があっという間に過ぎていく気がします。それはきっと、私が充実した学校生活を送っていると感じているからでしょう。私がこの大学を選んだ理由は、もっと広く深く社会福祉について学び、将来は福祉関連の機関で活躍したいという想いがあったからです。この大学では、専門知識・技術の習得のみに視点を置いた教育ではなく、豊かな人間性を持ち、柔軟な対応のできる幅の広い人間を育成することに重点を置いています。高度な英語教育やコンピュータ利用の授業等を幅広く取り入れていることも、より多くの教養を身につけられる点で魅力のひとつだと思います。

高校まで教育を受けてきましたが、大学は初めて自由が保障されている場だと思います。細かい規則に縛られることなく、時間の使い方や勉学に至ってもすべて自分で選択し、決定できます。以前とは異なり、何事にも自発的に取り組む姿勢が基本となります。自分らしさが存分に発揮できる機会が多々あるので、さらに新しい自分の可能性を見つけ出せるかもしれません。この大学は設備が良く整っている上、保健医療福祉を学ぶ多くの仲間と共に刺激しあいながら学べる環境があり、とても素晴らしいと思います。

また、先生方も含め、様々な人と出逢えることが楽しいです。空き時間は、サークル活動やアルバイトに励む人も多いでしょう。最近私は、講義を受けたりレポートを書いたりすることに新鮮さを覚え、大学生になった喜びを感じています。

しかし、大学生活には魅力がたくさんあるけれど、今が将来につながっていることを忘れてはいけないと気付きました。自分の目的意識を明確に持ち、先々の目標を持ってこれからの生活を大切にしたいと考えています。

出会いを大切に

看護学科2年
川越　美佳
（青森県青森高校出身）

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。入学から数カ月経ち、そろそろ大学生活にも慣れてきた頃ではないでしょうか。

この原稿依頼が、何故私のところに来たのかはわかりませんが、優秀な学生だからということは100％ありえないので前もって言っておきたいと思います。そういうわけで、学業について参考になることは書けないので、サークルの先輩にでも聞いてください。

さて、この保健大学は青森という本州最北の地に位置しながら、全国各地、さまざまな地域から多くの学生が集まり、さらにはさまざまな国を出身国とする教員陣に富んだ、ワールドワイドな大学です。このような大学で、あっという間の一年間を過ごしてみて、私が新入生の皆さんに言いたいことはただひとつ、人との出会いを大切にして欲しいということです。

私は地元、青森市の出身ということで、小学校時代から知っている友人も大学内にいるし、大学入学以前からの知り合いの友人もいますが、ほとんどの人にとって、自分の周りにいるのは、この大学に入学したからこそ出会うことのできた友人、教員陣の方々ばかりではないでしょうか。このように様々な文化を持ち、習慣の異なる地域からこの大学に集まった、たくさんの人々から日々刺激を受けることも、大学生活の醍醐味のひとつだと思います。私自身この一年間で、育った環境が違い、考えも違う人たちに接することで、色々と考えさせられることも少なくありませんでした。

これから皆さんが過ごしていく４年間のなかで、色々な人と出会い、そしてそこから色々な考えを持つようになれれば、それは大学で教員の方々から学ぶこと以外の、何にもかえがたい財産になるのではないでしょうか。そのような人との出会いを大切に、これからの大学生活を送っていってほしいと思います。

新入生へ

理学療法学科2年
久保　和也
（北海道函館ラサール高校出身）

理学療法学科二年の久保です。一年生のみなさん、青森県立保健大学入学おめでとうございます。入学してから少したちましたが、新しい生活には、慣れたでしょうか。ほとんどの人にしてみれば、初めての大学、初めての一人暮らしですから、慣れないこと、わからないことが多いと思いますが、そんなときは気軽に私たち先輩に聞いてください（私は、どのサークルにも入っていないので、一年生の方々とはあまり顔をあわせることがありませんが。）

お金のことに関しても、初めてのことが多いでしょう。銀行、郵貯のカード、通帳の使い方や、家賃、学費、ガス代、水道代の振込み、バイトを始める方はバイト代の入金など、いろいろありますが、大丈夫ですか？特に学費に関しては、金額が多いので、わからないことがあれば、受付、先輩に聞き、領収証を保管しておくようにおすすめします。あとで振り込まれていないという時に必要になってきます。学費以外にも、金額の多い買い物、例えば家賃、家具の購入などの場合には、説明をよく聞き保証書を読み、保管しておきましょう。

新しい生活が始まって、扱う金額も多くなってきます。それだけにトラブルも多くなり、注意もしなければなりません。普段からの心がけで、トラブルを予防していくようにしてください。

積極的にイッてみましょう

社会福祉学科3年
伊藤佳菜子
（秋田県角館高校出身）

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。入学から数カ月がたち、大学生活には慣れましたか？皆さんが入学して保健大学の雰囲気も名実共に、にぎやかになりました。お昼の学食のにぎわいは以前とは比べ物になりません。

大学での学びは高校の時とは違い、受け身的な学びではなく、自ら積極的に学ばなければならなく大変だと思います。しかし、積極的に学んだ人とそうでない人では差がつくと思います。

まだ、積極的に学ぶ事に慣れていないと思いますが、まずはゼミや講義でのグループワークなど少人数での学習・活動で積極的に参加・発言をしてみてはどうでしょうか？自分の意見を述べる力を身につけること、相手の意見を聞く力を身につけることは、とても大切なことです。そこから、新たな発見があったり、新たな考えができたり、グループワークは自分のレベルを高めるのにもってこい！の場所だと思います。そして、その学びを自分のモノにして欲しいと思います。それに、同じグループになった事がきっかけで、友達になる！という特典もあります。

また、勉強だけではなく時間を有効に使ってサークル活動等も楽しんでいるでしょうか？大学生活では多くの事に興味を持ち、いろんな人や考えに出会うことも大切です。

私たちが一年生の時は先輩が一学年しかいなかったので相談等をしても量的にいろんな意見を聞くことができませんでした。しかし、一年生の皆さんは先輩が三学年もいるので、学科の先輩、ゼミの先輩、サークルの先輩に気軽にどんどん話しかけてアドバイスをもらったり、意見を聞いたり、いろんな場所に出向き多くの活動に参加して多くのモノを得、吸収していって欲しいと思います。人脈は宝物です！

私たちも皆さんが、大学生活のいろんな場面で気軽に声をかけて来てくれるのを楽しみにしています！学年、学科をこえてみんなで保健大学を盛り上げて行きましょう!!

日時：平成14年4月5日(金)～6日(土)
場所：青森県青年の家

新入生合宿研修実行委員会
委員長　石鍋　圭子

平成14年４月５日～６日、恒例の新入生合宿研修が雲谷（もや)山の麓、青森県青年の家で行われました。青森にしては春の訪れが早かった今年は残雪もごくわずかで、暖かいお天気に恵まれ、学生と教職員の相互交流がなごやかな雰囲気の中に進みました。この研修は新入生が本学の学生としてよりスムーズにスタートできるように計画された１泊のプログラムです。４学年が始めてそろった今年は、樋口大輔自治会長を筆頭に２年生を中心とした上級生21名が参加し、6日のレクリエーション大会はより学生主体の研修となりました。

新入生合宿研修の目的

本研修は、次の３つの目的で計画されます。

(1) 青森県立保健大学の教育方針、教育内容を理解する。

(2) 看護学科、理学療法学科、社会福祉学科の学生相互交流を行い、友達の輪を広げて実りある学校生活を行うための土壌づくりを行う。

(3) 学生と教職員との交流を深め、両者の信頼関係を深め、よりよい教育の実践を行うための環境づくりを行う。

研修プログラム

１日目の午前中、大学から大型バス５台で移動した新入生162名は、1室６～８名にわかれ、先ずは荷物整理をした後に大研修室に集合。実行委員

オリエンテーション

相談コーナー

長、学長あいさつに続いて、「青年の家」からの諸注意。次いで、小比類巻かほる作詞・作曲の校歌「新たな未来へ」が披露されました。ちょっと難しいこの校歌はなかなか唱いこなせないのですが、果敢に挑戦した米澤教授の美声に皆から拍手喝采、いつものテープ演奏よりずっと評判でした。

続く人間総合科学科目のオリエンテーションでは、降りかかる英語のシャワー。新入生は目を白黒させながらも、英語の楽しさを感じ、素敵な先生も見つけたようでした。各学科別にオリエンテーションでは、午前中に履修科目等のガイダンスを済ませているので、紹介する方の先生達は、グループ別にしたり、寸劇仕立てにしたり、創意工夫に苦慮したところです。研修後のアンケートでは幸いにも、「フレンドリー」、「面白かった」、「先生達一人一人に個性があり、親しみやすそうだと思った」、「直接先生方の声が聞け、講義への抵抗感がなくなった」等、ほとんどの学生が良かったと答えてくれホッとしました。

夕食後の専門職へのいざない＆相談コーナーでは、学科別に相談コーナーを設けました。新入生は午前中のガイダンスであやふやだったところを確認したり、わからなかったところや将来の進路を個別に相談するなどで過ごしていました。上級生の相談コーナーも人気があり、盛況でした。

夜は番外ですが、遅くまで廊下に声が響いていましたから、きっと盛り上がったことでしょう。

２日目は、上級生有志による全学交流レクリエーションでした。４年目の今年はすっかり学生主体が定着し、人間知恵の輪、綱引き、長縄飛びなどが要領良く進行されてました。これらの種目は赤・白・黄・青の４グループ対抗で行われました。新入生や上級生はもちろん、教職員も負けじとついつい力が入って、終始笑いと歓声の絶えない一日でした。ちなみに、優勝は黄色組、賞品は図書券でした。

新入生合宿研修で安心と友達が得られ、大学生活の第一歩を、希望をもって踏み出した新１年生ですが、夏休み間近の今はもうすっかり青森県立保健大学学生に馴染んでいます。こうした行事の裏には、バスの手配から会場設営まで、大学事務職員の苦労も多く、実行委員の教員も大変です。

今年は、研修最後に行方不明者が発生!?５月病の季節も近く、トイレで蹲ってはいないか、林の中に遁走したのかしら、とそれは心配して捜しまわりました。結局、点呼時に返事がなかったと判明して一件落着。新入生の皆さん、名前を呼ばれたら返事をしましょう。

レクリエーション

朝の清掃

日時：平成13年12月21日　17:10～
場所：青森県立保健大学Ａ棟大講義室

人間総合科学科目特別講義

テーマ『共生の時代』

黒川紀章

戦後の東京は焼け野原で、建築として残っていたのは京都と奈良だけであった。日本の古建築が残っていることと、仏教に興味があり有識思想というインドの哲学を勉強したかったため京都大学へ進んだ。大学院は東大に変わり、まだ学生であった40年前から建築家として仕事をしていた。

「決定的に互いに矛盾を持っている、あるいは決定的に対立があるのに互いが互いを必要としている」という関係をどういう言葉で表現するのか、調和、共存、融合、妥協という日本語はあったが、私の考えているこのことをどの言葉を使っても説明できなかった。調和という言葉には対立が無いように聞こえ、また、共存という言葉は互いに顔をそむけてその場に一緒にいるように感じた。私が必要としていた言葉は、決定的に対立し、本質的に違うが、互いを必要としているという関係で、その言葉が日本語の辞書になかったので、やむなく「共生」という言葉を作った。「共生き(ともいき)」という言葉が浄土仏教の考え方の中にあるが、それは仏教の教えを説く言葉であり、私が言おうとしている言葉とは全く異なる。例えば、アメリカとアフガニスタン、あるいは日本と中国、これらは決定的に違う。又は対立がある。しかし、宗教が違う、文化が違うからと、一つの国だけで生きていけるか。世界はつながっていて、互いが互いを必要としているのである。対立して戦争をしているが、互いを必要としている。それを、1960年に「共生」と定義した。今では誰もが使っているが、その定義を正しく知っている人が少ないのが残念である。

ヨーロッパでは、アリストテレスからカント、ヘーゲル、デカルトに至るまで、「二元論」というすばらしいものの考え方を作り出してきた。その二元論のおかげで合理的なものの考え方をいち速く進めることができ、ヨーロッパの近代化に役立った。

日本は、このヨーロッパを手本にして近代化し、高度成長して世界第2位の経済大国になった。しかし、20世紀はお金で世界が狂ってきた時代だったのではないか。科学技術が重要視されてきた時代ではあったが、バランスを欠いたのではないかと思っている。例えば、人間の能力に「理性」と「感性」がある。芸術や文化など「感性」は、20世紀は随分馬鹿にされてきた。本当の人間らしい時代というのは、経済と文化が同じくらい大事にされる時代である。人間の能力を「理性」と「感性」に分けることなく、同時にうまく使いこなせる人間が出てこなくてはならない。芸術的な感性と数学的な理性、その二つを同時に使って自分の能力を発揮できるように教育することが大切である。これも人間の感性と理性の共生である。岐阜県に国際メディアアカデミーという大学院大学を作った。ここでは、大学で機械やコンピュータを勉強してきた人達と、絵を勉強した人達を一つの教室に入れ、新しいコンピュータソフトウェアを作る能力を開発している。そういう時代である。

私は、トヨタ自動車相談役の豊田章一郎と友人関係なのだが、私は日本の車、特にトヨタの車が嫌いである。なぜトヨタの車が嫌いかというと、エンジン開発の目標が静粛な音の出ないエンジンを開発しようとして努力しているから。ヨーロッパのルノー、メルセデス、フェラーリ等は、いい音が出るエンジンを開発しようと努力しているから、体が震えるほど音がセクシーである。この違いは大きい。いい音を作ろうとすると、エンジンを開発する時には、チームの中に音楽家がいるのはあたりまえだ。それが、経済が発展するには、文化の力がないと発展できないということであり、共生の時代を意味する。

黒川紀章氏プロフィール（黒川氏は本学校舎を設計されました。）
建築家。日本芸術院会員。1934年、名古屋市生まれ。京都大学建築学科を経て、東京大学大学院博士課程修了。英国王室建築家協会名誉会員、米国建築家名誉会員、フランス建築家協会正会員。著書に、『新・共生の思想』『建築の詩』など多数。40年前から提唱している「共生」は、時代のキーワードとなり、『新・共生の思想』の英語版は、海外でも大きな反響をよんでいる。

オープンキャンパス・進学相談会プロジェクト代表
人間総合科学科目 教授 佐藤正昭

進学相談会を7会場で開催

入試広報の一環として、開学当初から参加してきました進学相談会も、今年度で４回目を迎えました。

進学相談会は、本学に県内外から優秀な学生を迎えるための大事な入試広報の中の一つであると考えます。参加大学同士のＰＲ合戦の場でもある今年度の実施状況は次のとおりであります。

平成14年度/実施状況

（人）

開催日	場　所	来談者数	参加教員
5/22(水)	八戸市	79(68)	6
5/23(木)	盛岡市	37(24)	3
5/27(月)	仙台市	22(16)	4
6/4 (火)	秋田市	20(21)	3
6/6 (木)	弘前市	43(70)	6
6/7 (金)	青森市	58(60)	6
7/5 (金)	函館市	10(16)	4
計		269(275)	

※来談者数欄の（　）は前年度数

昨年度と比較しますと、会場毎の増減はあるものの横ばい傾向といえます。ただし、来談者の中で進路指導担当の教員や保護者の参加が、昨年度の倍以上であったこと等は、うれしいことであります。ちなみに会場全体の入場者数は、昨年度の4,376人に対し今年度は4,371人という結果であります。

進学相談会は、大学側から直接、教育内容や資格取得のこと等を聞ける貴重な機会であるだけに、高校生や進路指導の先生、あるいはご父母の方等が真剣な表情で相談に訪れます。それだけに我々大学側も誠意を持って対応する義務と必要性があると言えます。

来年度以降の開催にも、多数の相談者を期待しておりますので、その節は本学の教職員のご協力方よろしくお願いします。

進学相談会/八戸会場

ようこそオープンキャンパスへ！

6月22日(土)、予報からしても完全に雨だと思っていた天候も昼頃までには曇り空から晴天へと回復し、まずまずの天気と言える中で開催されたオープンキャンパスは、約391人の方々に参加を頂き無事終了することが出来ました。

今年度のオープンキャンパスは「夢・体感」と称して、午前の部は、3学科がそれぞの会場で「オリエンテーション」、「学科ガイダンス」、「学科のカリキュラム」、「入試ガイダンス」等についての説明会を行い、午後の部は、キャンパスツアーとして、各学科毎に参加者が自由に見学や体験ができる企画をしました。「模擬講義」、「見学・体験・実習コーナー」、「ビデオ上映」、「インターネット体験コーナー」等、保健大学ならではの設備やキャンパス内の雰囲気を肌で感じて頂いたことと思います。いずれの会場でも、参加者は担当者の説明に熱心に耳を傾けていた姿を拝見できましたことは、私どもプロジェクトメンバーといたしましても、また本学に取りましても感激ひとしおであります。開催に当たっては、前年度のアンケート結果を基に、改善や工夫をこらしているつもりですが、さらなる改善を望むところは帰りのアンケートに忌憚のない意見をお願いしたところです。

さて、参加者にとりましては大学選びの選択肢はいろいろあると思いますが、「キャンパスに入って感じる雰囲気」……これを大事にしてほしいと願っております。もしも今回のオープンキャンパスで本学に対する関心と理解が深まり、そのことが結果として、本学への入学志願に繋がるとするならば、この上ない喜びであります。最後に、今回の企画に当たったオープンキャンパスプロジェクトの委員、そしてご協力いただいた教職員、またボランティアとして参加、協力してくれました在学生の皆さんに、心からお礼を申し上げます。

日中笹川医学研究者制度研究者

藩娜さんインタビュー

（研修期間/平成13年4月～14年3月）

日本に来た時の印象

礼儀が正しいです。よく会うと、挨拶をする。中国では、「ニーハオ」だけ、あまりないです。青森の人はとても親切で優しい。中国人よりもっと親切。私は自分の国にいるようにあまり寂しくないです。何か問題があって聞くと、みんな嫌ということない。親切に熱心に教えてくれました。ですから、私はとても日本の人が好きです。

日本で学んだこと

たくさんあります。看護の質評価の勉強、私の論文のテーマにし、上泉先生について勉強しました。研究の方法を身に付けました。看護の質の向上と改善の為、質評価のことが重要だと思います。

県立中央病院で実習しました。看護の組織、業務、教育いろいろ勉強しました。中国に帰ってから報告を雑誌に載せたいと思います。病院で学んだ中には、中国と違いがあります。看護婦さんは仕事をする時､自分の事はしないで真面目に仕事をします。中国では、ある人は自分のことをやりながらです。教育もとても進んでいます。あと、組織の体制、業務についてもとてもきちんと書いています。看護記録は中国よりずっと詳しい。その患者に何をしましたか､何のケアをしましたか、患者さんの病気の重さ、全て記録しました。将来、法律的にも重要なものだと思います。

将来について､その他

将来､東京女子医科大学で続けて勉強したいです。そのとき、勉強したいことは､経済的な看護管理。中国は今経済的な看護管理が重要だと思います。あと、患者さんと看護婦の満足度を知りたい。患者さんの満足度は、いい看護ケアを提供します。看護婦さんの満足度から病院・勤め先の魅力を知

り､魅力的な看護職場を作ろうと考えています。看護婦さんのいろいろなことを考えてあげます。

日本の設備はとてもいいです。病院の設備、とても進んでいます。中国は、私の病院では病棟の中にコンピューターがせいぜい1台です。私は来る前に全然できなかった。ですからこの1年間で中国にいる何年もの勉強しました。

日本にいる一年間、幸せでした。最初は食べ物も口に合わないで食べられない、あと､いろいろ考えすぎて食欲がでなかった。ですから､最初やせましたが、今は戻りました。中国は、昼休みが、夏は3時間､冬は2時間あります。みんな近いところに住んでいますから、家に帰ってよく休みました。昼は食べてからすぐ眠りたい。ですから最初とても疲れました。今は、慣れて夜も遅くまで何か勉強します。

保健大学に私はとてもいい印象を持ちました。ここで続けて勉強したい。けれども大学院がないので仕方がないです。来年では、試験に合格できるかどうか自信がないですから、続けて勉強したほうがいいと思います。大学院では、金井先生について学びます。

一年間私はとても充実した毎日を過ごしました。何も勉強がなければ、たぶんふるさとを懐かしみ寂しく感じます。毎日スケジュールいっぱい、勉強いっぱいありましたから、はやく終わりました。日本の国民に何かお役に立てばと思いますけれど、私は自分のレベルがないので何もできない。これまでの事、心から感謝いたします。

（インタビューア　看護学科/秋庭由佳助手）

青森県海外技術研修員

孟　開さんインタビュー

（研修期間/平成13年7月～14年3月）

日本に来ての印象

私は去年の６月に初めて日本に参りました。千葉県の幕張というところに日本語を勉強するために参りました。幕張というところはすばらしいところですね。高いビル、アメリカっぽいところですね。大手の会社がたくさんあるです。町がきれいだし、空気がとても新鮮です。海のとなりですから海から吹いてくるかぜがとても新鮮です。どこでも緑の木が見えます。それが私はびっくりしました。

日本語や日本の習慣を勉強していて一番の違いは

困ったこととか・・。大きな困ったことはないんです。日本と中国の文化、だいたい同じなんです。ただ国民の性格（？）個性とか小さい区別があるんだと思います。考え方、仕事のやり方。日本人は仕事に対して一生懸命に、とても真剣にやります。それはびっくりしました。

青森の印象は

青森市に参ってから、最初の印象は青森県の県民はとてもやさしいし、生活は桃源郷のようでした。（桃源郷！?）そうです。（笑）小さいですけど静かだし、雑音がないし、みんな豊かな生活をしてますし、桃源郷の印象があります。（すごくいい印象なんですね。）そうです。山があります。青い山、青い空、青い海。それは青森県！

県内で印象に残った場所は

十和田湖行ったことあります。一番深い印象に残っているのは、浪岡？の中に日本の古い伝統的な文化が残っています。昔の部屋？（家？）家、その日本風の生活を日本風の家ではじめて見たんですね。いい印象です。これは文化の面で、自然の環境面では十和田湖いいですね。汚染が無くて。湖はとてもきれいで、ごみがなくて。とてもガラスのようで、ガラスよりもとても透明ですね。日本人の環境意識がいいです。

大学で一番勉強になったこと

右／孟開さん
左／社会福祉学科三栖教授

一番興味があるのは日本の社会保障、特に国民皆保険、国民年金の二つの大きな柱として日本の経済とか発展を促進しました。それは一番興味があります。だけど、時間がちょっと短いです。だいたい日本の社会福祉の内容を了解しましたけど、もっと詳しい内容はまだ身につけられません。

細かいことでもう少し知りたかったこと

例えば日本の国民皆保険不備から整備まで発展の過程にどんな問題がありますか、その問題対してにどんな政策を策定して、この問題を解決しますか。つまり解決手段について、こまかいことを勉強したい。中国は日本を真似て国民皆保険を建設するためには必ずそちらの問題を会うことができますけど、解決手段を学ぶことで中国に活かして、それは役に立ちます。いま、中国は社会保障は建設中ですから、この時期に日本の経験、貴重な経験を引用したい。

中国にもどってから

私は日本に参った前に中国での仕事は医療管理です。医療管理つまり遼寧省の地域にさまざまな病院を管理して医療政策を策定します。その中に医療保険、いま改革中ですけど、特に中国の農民と収入の低い人、低所得者の医療保険はどうすればいいでしょうか？ときどき考えています。日本で研修してから、もし日本の社会保障、医療保障をちゃんと勉強すれば、中国に帰ったらその医療保障について一生懸命に働きたいと思います。

それから、もしできれば、助言として日本の年金制度について地方にそのいい年金保険を紹介して中国の国内に関係する人に紹介したいと思います。

（インタビューア　社会福祉学科/田中志子助手）

健康科学研究研修センターの構成は？何をしているの？

健康科学研究研修センター長
嵯峨井　勝

青森県立保健大学・健康科学研究研修センターは、平成11年4月の本学の開設と同時に開設され、青森県の保健・医療・福祉分野の学術水準の向上をはかり、その成果を県民、地域住民の方々に還元することを目的に活動をしてまいりました。上記目的実現のために、本センターには、研究開発科、研修科、国際科の３科をおいています。

研究開発科では、主に青森県の地域住民の保健・医療・福祉分野の問題解決に寄与する研究の遂行をサポートしています。このため、保健・医療・福祉分野の専門職の方々等の協力を得ながら５つの種類の研究（学術研究、地域研究、奨励研究、行政課題研究、広領域研究）について、40以上の研究テーマを掲げて取り組んでいます。また、雪国の健康に関する研究と実用技術開発研究をコーディネートしています。

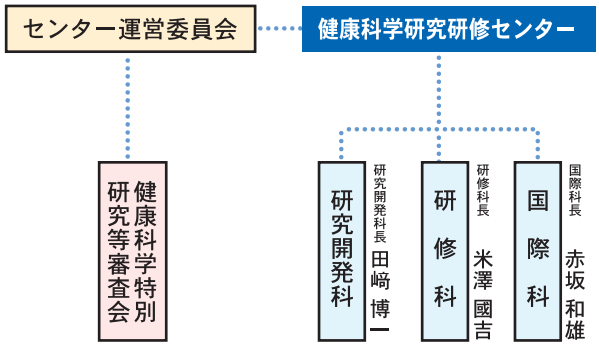
研修科では、介護保険の問題点や保健・医療・福祉の連携・統合はどうあるべきかなどのテーマで本学で大型研修会を開いたり、本学教員が県内保健所などに出向いて講演を行う「出前講座」や県内の方が大学を見学に来られた時の「一日研修会」などを開き、地域への貢献に努めています。

国際科では、本学の学生に広い世界を知ってもらうため、外国の保健・医療・福祉事情を紹介したり、英語に親しんでもらうための国際ミニシンポを開いたり、外国の大学等との学生交流や学術交流などの企画や交流協定の作成などを行ってきました。

センターの施設は旧高等看護学院を改修して、教育・研究Ｃ棟とした建物の2階に設けられます。そこを拠点として、今後ますますセンター独自の研究・研修・国際化の事業を推進していきたいと考えております。さらに、平成15年4月には大学院開設を予定していますが、大学院開設後にはソフト面での受け皿となり、より高度な研究、研修および教育の場となって、その成果を青森県民をはじめ広く世界へ発信していきたいと思っています。

センターの運営はセンター運営委員会のもとですべて本学教員の兼任で行われています。本学では比較的大型の特別研究費を設定し、全教員を対象に上記の研究に研究助成するシステムを持ち、学内外の研究者・専門職者の方々との共同研究を積極的に推進し、本学の学術研究水準の向上に努めています。また、得られた研究成果を青森県の保健・医療・福祉分野の向上に役立てるべく努力しています。研究成果は、まだ発展途上にありますが、地域での包括ケアシステム構築に向けて地道な努力が芽を出しつつあります。研修事業としては、今年10月5日㈯に保健・医療・福祉の連携、統合をめざしたシンポジウム（研修会）を企画し、国際交流もワールドカップで深まった韓国をはじめとして学生と教員の交流が動き出しています。

今後も、センター事業を、より県民の目に見える成果に発展させるべく努力をするつもりでおります。何卒、県民各位の忌憚の無いご意見、ご指導をいただけますようお願い申し上げます。



テニスサークル

社会福祉学科3年 楢崎　夏希
（顧問：Alan Knowles 教授）

みんな仲良しの先輩達から創られたテニスサークルは、今年で約90名のメンバーを率いるほどにまで成長しました。中には、名前だけで全く会ったことのない人もいますが‥‥。

何よりもこのサークルは、テニス未体験者でも、テニスを十分に楽しめるという特徴があります。実際、私もその１人なのですが、先輩や外部の方のわかりやすく楽しい指導により、ほんの何ヵ月かで打ち合えるまでになりました。普段は、みんなが集まって行うことは難しいため、自分達の都合の良い時間帯に自由にテニスを楽しめるようにしていますが、いつかはみんなで行い、試合ができたらいいなと思っています。実際に、先輩達の何人かは普段の練習の中でもゲームを行ったり、公式試合へ出場した人もいます。

この他にテニスサークルでは、先輩、後輩に関係なく楽しめるように、さまざまなイベントも行ってきました。去年は、ボーリング大会やバーベキューを行い、かなり盛り上がりました。もちろん、今年も楽しいイベントを企画しています。

これからはテニスにぴったりの時期です！みんなで仲良く、テニスを楽しみましょう。

日本文化研究会

(JCC：Japan Culture Club)

看護学科3年 徳光　美幸
（顧問：中村恵子教授）

サークル名だけを見るとすごくお堅いイメージですが、実際はとても楽しめるサークルです。

グローバル社会となりこれから多くの人が海外へと飛び立たれると思います。そして、海外に行って思うことは、自分がどれだけ日本について知らないかということです。

そこで私たちJCCは、“他国との文化交流を図るには、まず自国の文化を知ろう”ということを目標とし、このサークルを3年前に立ち上げました。初めは会員も、15人程度でしたが、現在は30人ほどまで増えました。昨年度は、ミシェルや藩さんなどの外国人の教員の方も一緒に活動をしたりしました。

活動内容としては、華道・茶道・着付けが主なものですが、難しいことを学んで資格を取ろうという目的では活動していません。“知って、楽しむこと。”これをモットーとしています。また、大学祭の時には、お茶会を催し、抹茶と和菓子を振舞うなどの活動も行っています。

お抹茶は本当においしいですよ。お抹茶の細かな泡と苦味と和菓子の甘み。はまること間違いなしです。また、着付けは浴衣が主ですが、着かたを覚えておくと何かと便利ですよね。

などなどJCCでの活動は、趣味の一つとして、そして、海外へ行った時など、コミュニケーションの道具や話の“ねた”にとても便利だと思います。ぜひ興味のあるかたは参加してみてください。

健康科学特別研究プロジェクト紹介
ユニフィケーションシステムの評価に関する取り組み

研究代表者：中村恵子１）
研究分担者：上泉和子１），石鍋圭子１），大井けい子１），細川満子１），舘山光子１），板橋玲子２），熊野則子２），植村康子２）
１）：青森県立保健大学　　２）：青森県立中央病院

本学では、平成11年の開学と同時に青森県立中央病院とのユニフィケーションシステムを導入し、実践・教育・研究の組織的連携システムの構築に取り組んできました。現在、大学からは12名の教員が兼職発令を受け、また臨床では25名の臨地教授、助教授が任命され、それぞれユニフィケーションシステムの中心的な役割を担って活躍しております。その他にも臨床実習や共同研究を通してユニフィケーションの輪が徐々に広がりつつあります。

導入後４年目を迎えたユニフィケーションの取り組みですが、今後、さらにシステムを洗練させ、効果的な連携を促進するためにも、ユニフィケーション活動の評価とフィードバックが必要となります。現在、日本国内でもいくつかの大学と病院がユニフィケーションシステムを導入していますが、その評価方法は確立されていないのが現状であり、研究的な取り組みが必要とされています。ユニフィケーションの活動は多岐にわたり、実践や教育における変化という定量的には測定しにくい現象をとらえるためには、従来の実証主義的あるいは解釈主義的な研究方法のみを用いて評価するのは非常に困難であり、限界があります。そこで、本研究プロジェクトでは、研究者が問題状況にある人々との協働によって実践に変化を与え、その変化を評価することのできる「アクションリサーチ」に注目しました。アクションリサーチにも多くの方法論がありますが、中でもソフトシステムズ方法論（SSM）といわれる方法は、学術的にも高く評価されており、このプロジェクトには有効な手段であると考えました。

平成13年度は、SSMの理論的理解を深めるため、大東文化大学経営学部の内山研一助教授を講師にお迎えし、６回にわたる勉強会を開催しました。また、勉強会と平行して行われた、研究者ミーティングでは、文献検討や今後の活動について活発なディスカッションが行われました。

ディスカッション風景

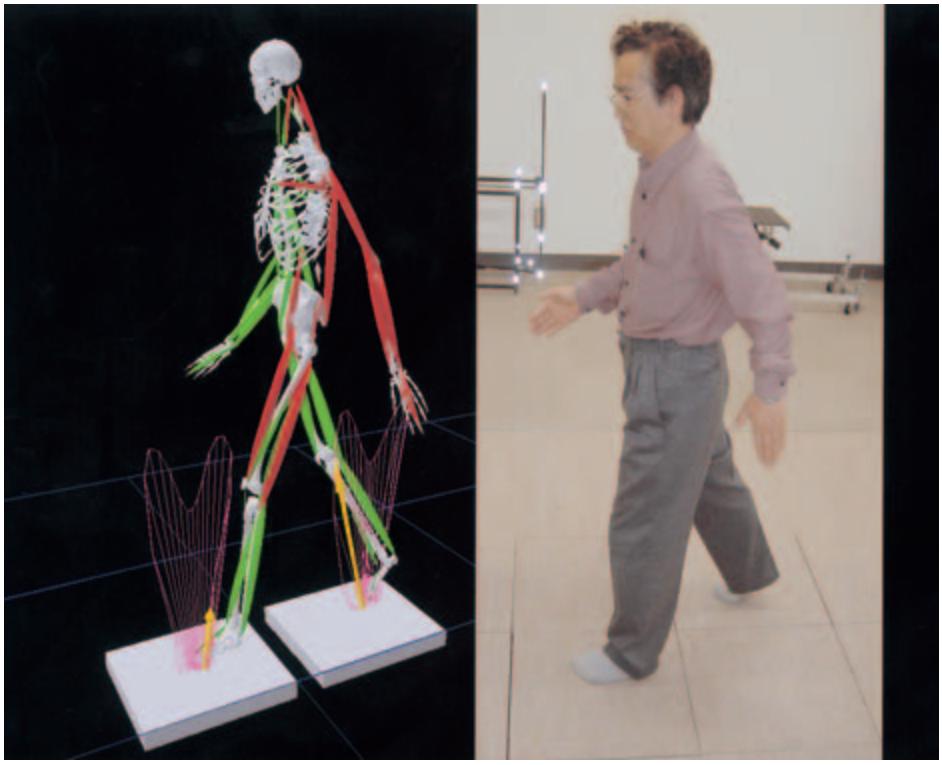
プロジェクトメンバー　右前列から上泉、中村、板橋、熊野
右後列から細川、大井、石鍋、植野、渡辺、館山

平成14年度は、開学当初から看護学科の細川満子講師がユニフィケーション活動で取り組んできた、県立中央病院の「看護相談室」を拠点とし、退院調整の強化や入院時点における退院計画のスクリーニングに関するシステム構築について、県立中央病院の看護職員と本研究プロジェクトのメンバーが協働で取り組み、SSMによるアプローチで評価を進めていく予定です。

まだまだ実験的な取り組みの段階ですが、これから得られる結果をもとに、様々なユニフィケーション活動の評価に活用していくことが可能になると思われます。今後、このプロジェクトが成果を上げることによって、本学と県立中央病院のユニフィケーションシステムが洗練され、実践・教育・研究の質向上へ寄与できることでしょう。さらに、他の実習施設とのユニフィケーションへと拡大・発展させていくことも可能であると考えております。本プロジェクトチームの今後の活動にご期待下さい。

（文責：舘山）

「産学官共同研究による高齢者動作支援システムの開発～デジタル・ヒューマンと感性の融合による新しい理学療法モデルの提示」（理学療法学科/佐藤秀紀教授）



デジタルヒューマンになった山下講師

私たちの研究グループでは、産学官共同研究体制で高齢者及び高齢障害者の動作支援システムの開発をめざして、３つの研究テーマに取り組んでいます。１つは「起立動作を支援する椅子の開発」、２つ目は「青森県の積雪・凍結路面での歩行支援技術の提示」、３つ目は「視機能特性を用いた歩行支援システムの開発」です。すでに本県の新産業創出を目的とした、青森県産学官共同研究推進事業に２年間に渡り取り組んできて、基礎調査はほぼ終了し、実用技術を開発する段階にはいっています。共同研究機関として本県健康福祉部、青森県工業試験場青森木工分場、青森大学大学院環境科学研究科、県内外の医療機関があります。

これらの研究に共通していることは、人間が立ち上がったり歩くときの動作支援をする技術を提示し、システムを構築することを目的としていること、そしてデータ取得の手法として、コンピュータ上に人間の動きをモデル化して再現するデジタル・ヒューマン・モデリングの技術を用いていることです。私たちは人間の身体機能を３つの機能軸からとらえます。すなわち、解剖生理的機能軸、機械運動器的機能軸、認知心理的機能軸から成り立つ人間について、それらの要素を総合的に解釈し、コンピュータによる解析でありながら、より人間の実質にせまった解析を試みようというものです。具体的には、人間がある動作を遂行することにより取得される運動データや動力学的データなどの物理量と、動作のし易さや快適さなどの心理的側面を表す感性データとしての主観量をマッチングさせて、より人間中心な情報処理を行っています。

このような手法は、独立行政法人産業技術総合研究所、及び独立行政法人製品評価技術基盤機構などが我が国の研究のメッカですが、これらの研究者とも交流をもちながら、理学療法分野の視点とノウハウを注入して研究の独創性を生み出していこうと考えております。

（文責：佐藤秀一）

向かって左から山下弘二講師、佐藤秀紀教授、佐藤秀一講師

地域福祉援助論分野

地域生活志向型小規模施設援助論に関して

（教授／米澤國吉）

現在の研究は高齢者の宅老所やグループホームなど地域生活を志向する小規模施設での援助論です。愛知県半田市の宅老所「ひだまり」では高齢者に対する実践を通して新しい援助のあり方が見えてきました。それは高齢者の発達にとって環境の持つ意味であり、その環境とは①居住環境②人的環境③社会的環境です。従来の社会福祉援助論との関わりでは援助者と被援助者間での人間関係を主軸とするソーシャルワーク論でしたが、宅老所が提起する援助論は、援助者被援助者関係をも内包する新しい援助論としての「人間発達環境論」である事です。特に人の環境については、援助者としての人、援助される立場の人、ボランティア・来客者など第三の層としての人であり、「人間が人間らしく生存・発達する要因としての環境」の中軸は人の環境である事を宅老所の実践は教えています。そうした援助のあり方をグループホームの研究に展開したいと思っております。以上の研究の一部を青森保健大紀要3(2001年)「地域生活指向型小規模施設援助論研究序説」として報告致しましたので、ご参照して頂ければ幸いです。

社会福祉援助技術分野

福祉の手

（講師／八戸宏）

人は誰でも「より良く、より幸福に生きたい」と願っている。しかし「社会的存在」として生活していく中で、誰もが「時代」の影響を陰に陽に受け続けながら生きている。中でも福祉の利用者（対象者）は、その影響を最も受けやすい人々であると言われる。

『老人や子どもを大切にできる社会は、真に強い社会だ』と若かりし頃学んだが、とかくこれらの人々の抱える悩みや課題は、後廻しにされがちである。めぐる「時代」は、「金」や「物」への強い執着を余儀なくさせている。

執着は経済面ばかりか、人間生活のあらゆる場面に悉く入り込んで、私たちを脅かしている。他者や社会に向けての自己主張は強まり、自己存在(アイデンティティ）の確認が難しくなった社会といわれる現代、年々歳々福祉を学ぼうとする若者の増加が夥しい、“自立を支え、ともに生きる”社会を標榜する社会福祉は、「他者を思う心が本物かどうか」、「ともに生きることの喜びとは」、「自立を支える手はいつ、どこに」と私たちに問い続けている。「自立の実現」のためには、社会の中にこの支える手がきちんと準備されて、面倒見ることを覚悟したシステムが求められている。差し出すその「手」は、手間ひまや、利用者の気づかいを心よく吸いとる「手」であって欲しいと考えている。

そんな「手」は必ずや様々な“くらし”や“おもい”を「かけがえ」のないものとして、しっかりと受け止めるに違いない。不可思議な「人間」や「人生」について学生と共に学びあっている。

児童福祉分野

非行児童の自立支援（助手／齋藤史彦）

昨年から「社会福祉援助技術現場実習指導」で児童自立支援施設での実習を希望する学生の実習指導に補助的に携わっている。周知のように児童自立支援施設（旧教護院）は「不良行為をなした者」等を対象に、入所、通所により児童の自立支援を目的とした様々な指導を行う施設で、前身の感化院から数えて100年以上の歴史をもつ施設である。

かつて私も他県にある児童自立支援施設（当時は教護院）で実習し、それを縁に夕方から翌朝まで宿直をする嘱託職員をさせていただいたことがある。実習を含めおよそ２年間、もっとも印象的だったのは就職先や進学先が決定し、措置解除されることになった子どもの笑顔である。就職してからや進学してからのことをうれしそうに話す子どもたちの顔は、希望があふれ、何の心配もないように思える。しかし施設を退所した後の子どもの中には再び非行を繰り返す子どももおり、援助の難しさを感じる。

児童福祉法の改正に伴い、児童自立支援施設は公教育の導入や寮舎形態の変化などを背景に、これまでの処遇論を再構築する必要性が指摘されている。施設を退所した子どもたちの自立支援にはまだ多くの課題があるが、少しでもそれに寄与できるような研究がしたいと考えている。

A New Life and New Challenges （Lecturer/Dennis Kelly）

My family and I moved to Aomori in April of this year. Although we are new to the area it feels like we have been living here for a few years. It was surprisingly easy to adapt to Aomori City and the university. I think this is due to the environment of Aomori. The roads are spacious and there are plenty of parks for children to play in, but most of all almost everyone we have met has been friendly and helpful. I would not hesitate to recommend Aomori as a place to live for other foreign people who come to Japan.

The City Office itself is more foreigner oriented. Some other cities that I have lived in during my time in Japan have provided little in the way of information and support to the foreign community. I have found the opposite to be the case here. When we first registered at the city office we were supplied with a comprehensive amount of information about the city, translated into English, and even a guide to the local dialect. Although there are comparatively few foreigners actually living here in Aomori the infrastructure is in place for further internationalisation of the city to be built on. I look forward to contributing to this internationalisation in the future. (In fact, just by moving and teaching here I have already contributed in some way).

Another thing that surprised me is the excellent working conditions here at the university. It seems that many universities in Japan lack the basic technology and pluralistic approach that are necessary for educational institutions of higher learning. This is not the case with this university as the technology is state-of-the-art and there is a distinct international focus which pervades most aspects of the university's culture. This is evidenced not just by overseas study and exchange programs but also within the functionality of the university such as this article being accepted in English, and even more subtle aspects like the bilingual signposting of departments and offices, which is currently in progress.

This pluralism can in part be attributed to the emphasis on English speaking ability in the curricular program, despite being a'Health and Welfare University'.This is a very thorough program that ensures students will be able to cope with the rigours of fundamental cross-cultural interaction when they are actually conversing with foreign people and, more importantly, engaged in their different professions. Being prepared for this kind of interaction is vital for all Japanese people in the modern era but especially for those in the health and welfare sector where effective communication can be the difference between life and death. When students leave the university hopefully they will not be intimidated by such interaction and their self-confidence will result in more satisfying relationships and ongoing contacts with foreign people, which in turn will help the situation of Aomori City.

However good the curriculum may be it needs students to be positively orientated towards their own education, and in my experience to date this has certainly been the case at this university. Overall, students attend classes regularly, perform above expectations, and enjoy their English studies. This makes for easier curriculum planning and more enjoyable teaching, while at the same time challenging the teachers to maintain a high standard of lesson for motivated students.

It is my hope that the reputation of this young university will grow not by marketing techniques alone but by the attitude and ability of the students who graduate from it. Over the longer term this is the most effective form of advertisement.

（総務課長/小野勝義）

事務局総務課の紹介については、保健大学だより第３号に一度掲載されていますので、今回は学生の皆さんにも興味をもっていただけるようなことを中心に紹介したいと思います。

１　まず、総務課の仕事を簡単に紹介

総務課の仕事を大別すると以下のとおりです。

①庶務；人事管理、給与関係、健康管理等

②経理；予算、収入支出、監査・検査対応等

③施設；校地校舎備品の管理、見学者対応等

２　教職員は何人いるか知ってますか？

教員は、学長以下専任教員58人、助手35人、臨時語学講師２人の95人です。

また、職員は、正職員が事務局長以下28人、非常勤職員６人、臨時職員７人の41人で、教職員総数は136人となっています。

このほかに学外からの非常勤講師の先生方が93人います。

学生の皆さんは、これだけの人たちに支えられながら大学生活を送っていることになります。

３　庶務の何が大変

庶務の最大の仕事は、教職員の人事管理と給料やボーナスの支給ということになります。

この他にも旅行命令簿の作成や出勤簿・休暇簿の整理など結構な仕事量になっていますが、一番難しいのはどこにも属さないもので、返答に困ってしまうことがあることと雑務というような細かい仕事が多いことです。

４　経理は毎日書類の山

収入事務は、受験手数料、入学料及び授業料が大部分を占めていますが、一時的なもので仕事量としてはそれほどでもありませんが、現金の取扱いとなるので、細心の注意を払う必要があります。

支出事務は、年間約６千枚の支出命令票を作成しますが、今年度から県庁出納局での審査が大学に任されたため、１件の書類に３回ハンコを押すことになり、３倍の手間がかかるようになってしまいました。

更に、旅行命令は年間約５千件にもなって、日夜その計算に追われているような状況で、しかも同じ件数の復命書を確認しなければなりません。

従って、総務課長の机には、日に何度も書類の八甲田連峰が築かれることになります（たまに雪崩を起こして、顰蹙を買ったりしていましたが、書類入れの段ボール箱を用意してもらいました）。

５　駐車場、駐輪場利用のお願い

本学の敷地面積は約９万㎡で、この中に大学棟、旧高等看護学院棟、多目的グラウンドなどがありますが、この他に駐車場２か所296台収容、駐輪場３か所326台収容があります。

駐車場の使用許可は151人が受けており、内34人が学生です。これから免許を取得しようとしている学生もいることと思いますので、駐車場を利用することになった場合には、必ず許可を受けるようにして下さい。

駐輪場については、どうしても管理棟前の第１駐輪場の利用が多くなりますが、第２・第３駐輪場に分散するなど学生と教職員が協力して見た目にも美しく利用して行きたいものと思っています。

《総務課職員紹介》

課長	小野勝義	
主幹	八木千加子	（経理）
主幹	大谷順一	（庶務）
総括主査	藤田繁行	（施設）
主査	中嶋朋子	（庶務）
主査	葛西昭徳	（経理）
主査	須郷奈緒美	（経理）
主事	舘山朋枝	（育児休業中）
技能技師	千葉雄	（公用車運転）
保健嘱託員	津内口恵子	
非常勤技術員	舘山和人	（施設補助）
臨時事務手	坂本奈美子	（学長秘書）
臨時事務手	松村奈穂子	（庶務補助）
臨時事務手	越田明子	（経理補助）

人事異動

＜新任・転入等＞

看護学科 講師
藤田あけみ （フジタ　アケミ）

約４年ぶりに青森に戻ってまいりました。やっぱり、青森の緑は一層、鮮やかに感じます。看護では「感性」が大切です。様々な刺激を受け、自然の偉大さ美しさに感動しながら、「感性」に磨きをかけたいと思います。

看護学科 講師
山田　典子 （ヤマダ　ノリコ）

地域看護を担当しています。仕事が終わり、家族の食事も済ませ「明鏡欄」に目を通すひとときが好きです。様々な生活の中の健康について取り組んでいきたいと思っています。宜しくお願いします。

看護学科 助手
木浪智佳子 （キナミ　チカコ）

今春は久しぶりに青森の桜を満喫しました。教育の現場は初めてですが、臨床時代と学生時代の経験を生かし、今後の仕事に力を注いでいきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

看護学科 助手
村松　仁 （ムラマツ　ヒトシ）

桜吹雪に見送られながら東京を後にして、桜の開花と共に青森入りしました。初めての青森ですが、皆様に見守られながら何とか仕事をさせて頂いています。今後ともどうかよろしくお願い致します。

理学療法学科 助手
前野竜太郎 （マエノ　リュウタロウ）

皆さんはじめまして。このたび７年振りに青森に戻ってまいりました。PTとして患者さんと目の高さを同じにし、患者さんとともに歩むことのできる学生を育てていければと思っています。宜しくお願いします。

人間総合科学科目 教授
佐藤　正昭 （サトウ　マサアキ）

教育行政畑から初めての大学勤務、これまでの時間が管理された生活から自分で管理する生活、何とか慣れました。少し時間のゆとりができたので好きな碁の腕を上げたり、ウオーキングを楽しみたい。

人間総合科学科目 講師
Dennis Kelly （デニス　ケリー）

Prior to coming to Aomori I lived in Tokyo and Koriyama, so to come to such a beautifully city with clean air was very pleasing for me and my family. The staff at this university are very friendly and helpful, and the students are interested in learning. I am very happy to be here and look forward to contributing to Aomori city in any way I can.

人間総合科学科目 外国人語学講師
Thy Nguyen （ティ　ウィン）

I've been living in Japan for over two years and am having a great time. I love the staff and students at this University, as everyone has been very friendly and kind. Please feel free to come and talk to me. I look forward to meeting you.

事務局 企画情報課長
嶋津　静司 （シマヅ　セイジ）

大学という全く未経験の分野への転勤で正直驚きましたが、一人娘が某私立大学（福祉系）に入学したのと時を同じくして本学に転勤したのも何かの縁と、気をとりなおして仕事をしています。

事務局 企画情報課総括主幹
竹澤　裕之 （タケザワ　ヒロユキ）

20うん年ぶりに大学というところに足を踏み入れ、自分の場合と比較して感じたこと。①誘惑の少ない、すばらしい立地環境　②施設・設備の立派さと行き届いた清掃　③サボリが少ない(?)、学生の真面目さ

事務局 総務課主幹
八木千加子 （ヤギ　チカコ）

スポーツ好きな私にとって、学内のトレーニングマシーンは魅力的。基礎体力アップを図り、ゴルフの飛距離を伸ばしたいと密かに期待し、転勤してきたのですが、残念ながら、まだ一度も利用できずにおります。

事務局 企画情報課主幹
松岡　浩美 （マツオカ　ヒロミ）

メメント・モリ…永遠の前の一瞬、2人の若い男性（小2＆年中)とめくるめく愛の日々を過ごしているおかげで、平日はひたすら爆睡ですが、週末の深夜は映画館で脳ミソを刺激する…やっぱりぐうたらなママです。

事務局 教務学生課主幹
小寺　順司 （コデラ　ジュンジ）

私、見た目はオヤジですが、心はいつも「一年生」です。だから、新入生のように、緊張でちょびっとこわばった顔で、うつむき加減に学内を歩いていますが、見た目ほど、実は怖くないんですよ。

事務局 教務学生課主幹
本田　親男 （ホンダ　チカオ）

福祉行政一筋のお役所生活でしたが、初めて福祉以外の業務に配置され、久々に新人気分を味わっています。楽しみなのは、ここ数年満足にとれなかった夏休みがとれるかも？？ちゅうことです。

事務局 総務課主査
中嶋　朋子 （ナカシマ　トモコ）

予想以上に緑あふれる環境で、昼休みに食堂から木々を眺めながら、密かに楽しんでいます。趣味はガーデニングと言いたいところですが、私をあざ笑うように生えてくる庭の雑草と戦う日々です。

事務局 教務学生課主査
上村　隆之 （ウエムラ　タカユキ）

サッカー好き、そしてタイガースファンの私にとって久々の興奮の一年！（注:原稿執筆時点において）前回阪神優勝は受験に挑む高３のとき、今回は３人の子供とチャンネル争い。時の流れをしみじみ思う今日この頃です。

事務局 教務学生課主事
根市茂美路 （ネイチ　モミジ）

八戸で生まれ、就職してからむつ市、五所川原市、弘前市と巡って、このたび青森市にたどり着きました。今から冬の雪の量が心配です。

＜昇任等＞ （14年4月）

理学療法学科助教授
岩月　宏泰（講師→助教授）

事務局総務課長
小野　勝義（企画情報課長→総務課長）

事務局教務学生課主幹
菅　牧子（総括主査→主幹）

事務局総務課主査
須郷　奈緒美（主事→主査）

事務局企画情報課
日野　智之（主事→主査）

＜転出等＞ （14年4月）

商工観光労働部副参事	菊地　眞樹	（事務局総務課から）
健康福祉政策課	須藤　浩	（事務局教務学生課から）
こどもみらい課	赤石　義人	（事務局企画情報課から）
障害福祉課	横山　哲	（事務局教務学生課から）
障害福祉課	木村　理	（事務局企画情報課から）
西北地方健康福祉こどもセンター	對馬　睦夫	（事務局教務学生課から）
人事課	鹿内　亮一	（事務局総務課から）
青森県監査委員	毛内　博	（事務局総務課から）
青森県立中央病院	佐々木真也	（事務局教務学生課から）
退職	小野寺伸吉	（事務局長）
退職	金谷　年展	（人間総合科学科目）
退職	堀口由美子	（看護学科）
退職	Jonathan Walsh	（人間総合科学科目）
退職	板野　優子	（看護学科）
退職	齋藤　圭介	（理学療法学科）
退職	志賀　文哉	（人間総合科学科目）
退職	飯嶋　正敏	（図書館）

編集後記

《活彩！保健大学だより》第6号をお届けいたします。開学４年目を迎え、各学年がそろい、大学も活気に満ち溢れています。来春、初めての卒業生を送ることになりますが、４年生はその前に、卒業研究、就職、進学、国家試験などの様々なハードルをクリアしなければなりません。

本号は学長の新入生歓迎の挨拶で始まり、入学式の挨拶・スピーチ、新入生合宿研修など、新入生歓迎の意をこめて、新入生関係に重点をおいて編集いたしました。また、保健大学をよりよく知っていただくために、健康科学研究研修センター・サークル・各学科の教室・新任教職員の紹介欄を設けています。お忙しい中、各欄の原稿を担当していただいた方々には深く感謝しております。

広報委員会では今後の活動として、新聞広報活動、受験誌への広報活動、学生募集ポスターによる広報活動、ラジオ広報などの活動を予定しています。

皆様からのご意見を活かし、本誌をより良いものにしていきたいと考えておりますので、どうぞ、よろしくお願いいたします。

（広報委員／藤田あけみ）

◎広報委員会委員
竹森幸一、赤坂和雄、勘林秀行、鈴木保巳、藤田あけみ、伊藤貞一
◎記録専門部会
秋庭由佳、李相潤、田中志子，井澤弘美
◎事務担当
大谷順一（対外広報担当）、
上村隆之（入試広報担当）、
根市茂美路（学内広報誌、広報委員会事務担当）

編集・発行／青森県立保健大学広報委員会（〒030-8505 青森市浜館字間瀬58-1 TEL017-765-2007）
バックナンバーはＵＲＬをご覧下さい。　ＵＲＬ/http://www. auhw. ac. jp/